

週刊読書人

毎週金曜日発行
 定価 260円
 本体 248円
 株式会社 読書人 発行
 東京都新宿区矢来町109
 郵便番号162-0805
 電話 03(3260)5791(代)
 F.A.X 03(3260)5507
 振替口座 00150-9-57070
 前金購読料50週11500円
<http://www.dokushojin.co.jp>
 ©株式会社読書人2012

我が心の博多、そして西鉄ライオンズ

岡田 潔著

著者と面識のないわたしは、わたしもよく憶えているが、確実に同じ場所、同じ時間を過ごしている。場が一体となったパフォーマンスだった。その意味で、今はなき東京球場。時間は、ピシターとして上京したライオンズの試合中。そう、岡田さんと同じへ、わたしも「在野ライオンズファン」だったのである。毎試合必ず球場へ足を運び、三塁側スタンドで首を括りつて応援していた。

当時のライオンズは、もう「西鉄」ではなへ、「太平洋クラブ」「クラウンライター」の冠だった。そして弱かった。3連戦で1勝すれば上出来で、ホロ負け賞格の応援は、どんなに点差が開いても最終回まで盛り上がる。あの頃、岡田さんもわたしも、福岡監督率いる東尾、太田、竹ノ内、基、真弓、若菜といった選手たちに思いを賭けていた。

本文中「球場は劇場」の項で紹介されている後楽園球場でのファインターズ戦の降雨中断中のエピソード



四六判・208頁・1680円
 海鳥社
 978-4-87415-843-2

◇未来への再生・提言◇

過去にヒントを得てもいいではないか
 寺 脇 研

情を捧げてきた幼なじみの少女が金の力で無理矢理嫁がされたように感じてファンを辞めたのもおそろしく、緒だと思っ。

ライオンズ戦にそれほど思い入れを持ったゆえに、言うまでもなく巨人を破って日本シリーズ3連覇した西鉄ライオンズの栄光を目撃しているからである。夜空をそぐだけ明るくする平和台球場のナイター照明が、遠くからも望めた。それは、文字通りの輝ける希望の灯だった。球場人口へ続く昇りの坂道は、夢の道だった。

ただ、岡田さんわたしには6年の年齢差がある。それでも共通体験があるのは、町内の年長の子が小さい子を率いてガキ集団を形成していたおかげである。ニイちゃんたちが語る平和台球場周辺の木に登っての無銭観戦の武勇伝は、年少のわたしたちの憧れだった。

知っている。今の博多は、福岡ドーム周辺に象徴される都市開発で昔の面影を失っている。むしろ、村上龍「半島を出よ」のような近未来イメージの都市になってしまった。そんな繁栄の、つい50年前にあった人情や街の風情を、この本は鮮やかに回想してみせる。その時代を知らない若者が読んでも想像がつくだろう。『三丁目の夕日』のような作られたまがいごとではない、若者男女ひとりのひとりの切実な人生がここには息づいている。どいっても、単なるノスタルジーではない。むしろ未来への再生提言としてわたしは読んだ。経済や科学技術にばかり目を向けてきた50年間を省みて新しい価値観を構築する、それは、過去にヒントを得てもいいではないかとの問いかけである。21世紀、リーマンショックや大震災、原発事故を経て今のわたしたちにとっての西鉄ライオンズに当たるものは何か。博多の町に当たる「シムニティ」はどんな形のものか。熱中できる映画はどんな作品か。それを考えてみる気持で

近所の映画館……そこらまでは記憶を共有できるにしても、炭坑、遊郭、新聞配達少年となると、世代の違いは明瞭だ。しかも岡田さんは生粋の博多っ子。貧しい社会にも「心を満たしてくれる人、風景が存在していた」ことを、身をもって

読物文化

なる本である。(てらわき・けん氏)京都造形芸術大学教授・映画評論家
 ★おかた・きよし氏は演劇プロデューサー。演劇企画制作会社トム・プロジェクトを立ち上げ、創作劇を国内外で公演。二〇〇八年度に第43回福伊國屋演劇賞団体賞受賞。著書に「変わるなノスベイン」がある。一九四六(昭和21)年生。